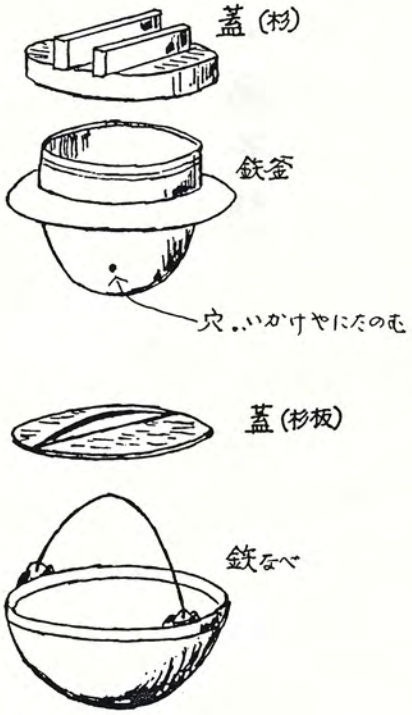
第十章　懐かしい行商人・あそび

第一節　行商人

鋳掛屋

鍋や釜の底にあいた穴の修理をする職人である。昔の鍋、釜は鉄（イモノ）が多く、高価であり古くなって穴があいても捨てないで鋳掛屋の来るのを待っていた。年末になると廻って来て戸別に注文をとり、毎年、石上神社の南側の日だまりを仕事場にしていたようである。フイゴで炭火をおこし、銅をこまかく切断して、ヘナチョコ（小さい砂の容器）に入れ、フイゴで高熱にして溶かすのである。大勢見ている前で修理してくれた。底の穴に流し込み、上下から叩いて修理完了である。工法は極めて簡単であるが、穴の部分は厚くなっているのでしばらくは使えたようである。

鉄釜で火力の弱い松葉等で炊くご飯は一番美味しいとされている。炊き場の中には土で作った『かまど』がいくつかあり炊き木で煮炊きをしていた時代、女の人は大変であった。炊飯器の出現によって、煮炊きの長い歴史に幕を閉じたのである。昭和三十五年頃であった。



鶏屋（卵屋）

戦前、午後になると卵買いが自転車で廻ってきた。当時どこの家でも十羽から二十羽ぐらいの庭鶏を飼っていたので、何個かの卵を売ることができた。稼ぎのない時代何よりの現金収入であったらしい。買い集めた卵をモミガラと一緒にリンゴ箱に詰めて東京方面に出荷していたようである。ケーキの材料にでもなっていたのか、親達が話していたが、ついぞ食べたことはなかった。

子供同志家で卵を食べたことが話題になる事から、恐らくどこの家でも売ってしまったのであろう。運動会の朝、卵で

も飲んで精をつけるか、という具合で家で食べる事は滅多になかった。飼料は残飯やコザイ（不良米）糠であったので鶏の数は家によって違っていたようである。

祭りや年の暮れ、古くなった鶏を父親がツブして、家族全員で堅い肉を食べ、骨までシャブった事も懐かしい。しかしその廃鶏を食べないで、売ってしまった農村の生活が普通であった。飽食の今と違って何を食べても美味しい時代であった。

ぼて（棒手振り）

魚、青物などを、天秤棒でかついで売り歩く人のことである。青堀、大貫方面より漁師が「手ぐり」という方法で取った、新鮮な小魚等を売りにきた。

「おはよう」という、威勢のよいかけ声が聞えると、どこの家も、家族分の魚を買いもとめた。

近くに魚屋はなく、また交通不便な時代、農繁期の忙しい時期には、たいへん重宝したものである。

自転車、オートバイと売り歩く姿は、時代とともに変化したが、昭和四十年代まで、各家をまわる「ぼて」をみかけることができた。

下駄の歯入れ

大昔から日本人の履き物として定着してきた下駄も最近はほとんどみかけない。昭和十年代、小学校に通う子供は着物に下駄であった。着物と下駄、洋服と靴ということで着類との関係も深いようである。昭和三十年頃までは、家のまわりで年寄りが下駄を履いていたが、安価なサンダルが出てきたので逐次、代わっていったようである。

我々の知っている駒下駄、足駄、塗下駄、ポックリ下駄は今から三百年前の元禄時代に大流行したものであり、派手な朱塗下駄は禁止令が出たという。

桐材の柾目や板目で作った高価な駒下駄、杉材の下駄、いろいろ履いたことがあるが、台部に別材の歯を差し入れて作った、差し歯下駄、雨天によく履いた高い下駄、いづれも歯が減ってくると、入れ替えが必要である。年に数回歯入れ職人が注文をとりに各家に回ってきた。懇意にしている家の庭先にむしろを敷き、用意してきた歯を下駄に合わせてカンナで削って差し込み完成である。歯の材料は樫の木か、ホオの木であった。夕方になると出来上がった下駄を持ってくるのでお金を支払って受け取ることになる。近所の子供が集まって見学したのも五十年前の事である。

第二節　男の人達のあそび

わっぱ回し

暮から正月にかけての男の子の遊びである。直径十センチ位の丸太を、三から四センチの厚さに切り、一人が地面の高い六郎平の角から、川の方向に向かって勢いをつけて投げころがす。他の子供達は、それぞれ、丸太棒を持ち、家の角々でわっぱを止めて遊んだ。時には、羽織の前後を逆さに着て、羽織の下を持ち、わっぱをさらって止めることもあったが、顔に直撃し、痛い思いをしたこともあるという。角で止めた所から、また投げて、川渕の所までいったら勝ちとした。

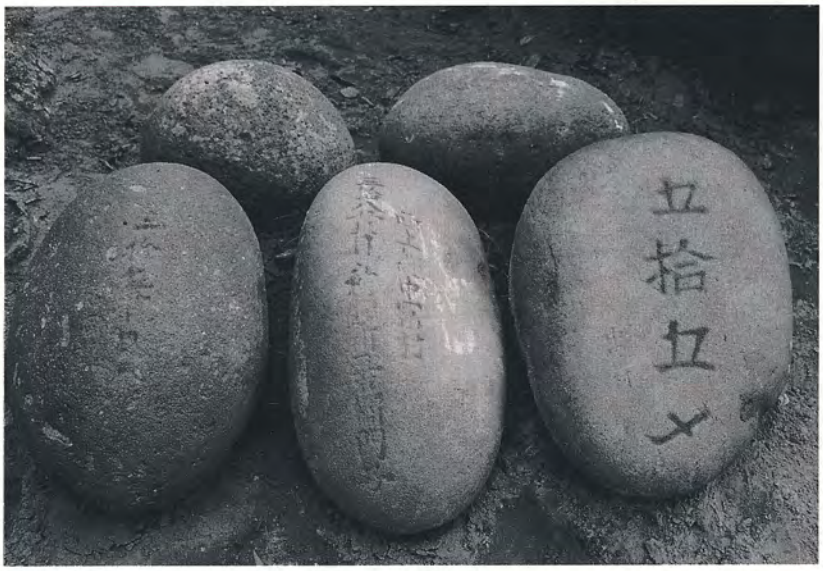
この遊びも、大正十年頃まで続いた。

ちから石

石上神社の境内の隅に五ヶの石がまとめて置かれてあるが一番大きいものが五拾五メ、次が三十九貫、三十八貫、他の二ヶは石が小さく刻字が読めない。西上総中富村、齊藤新五右エ門子と記されている。

『若衆が集まってはよく力くらべをやったよ！』と話していた人達は既に故人である。一番の力もちは誰で、その次は

誰という具合に言い伝えがあったようである。何の遊びもない時代、力をもて余す若衆が神社の境内に集まり、隅に置いてある石を持ち上げて力を競い合い、楽しんだのであろう。



コマ回し

昭和十年前後、正月の男の子の遊びといえば凧上げか、コマと決っていた。現在テレビで見るベーゴマと違って、危険なブッツケゴマである。直径が六～七センチ位で鉄の心棒に樫の木、それに鉄の輪が嵌(は)まっていて重く頑丈(がんじょう)にできていた。

高い位置から、回っているコマを狙ってブッツけるのである。場所は地面の堅い道路が選ばれた。最初に順番を決めるために、全員で同時に回し早く止まった人から一ペート、二ペート、二天下、一天下、の順が決められる。

これからが大変である。まず一ペートが回すと次に二ペートが思い切ってブッツけるのである。命中すれば相手のコマは止まって自分のコマだけ回り続ける。次に三ペートがこれを狙うということで一天下が最後である。当然残るのは一天下である。しかし勢い余って自分のコマが回らなかったり、

命中しなかったりで順位は適当に変わった。飽(あき)もせず夕方までやったものである。昭和十五年、コマが三十五銭、麻縄が十五銭であった。

流し針

大きい釣針に餌（ドジョウか太いミミズ）を付け、竹の先に縛って夕方川岸に出かけるのである。場所は江川の両岸である。一人で五、六本であるから場所選びが大変である。ウナギや鯰は夜行性であり、果して今夜この場所に来るのか子供心に心配であった。翌朝早く引き揚げに行くと遠くから竹の先に白い塊(かた)まりが見えればウナギである。逃げようとして糸を全部胴に巻き付けているからである。ナマズと半々であり家に持ち帰って庭鶏の餌か、大きいウナギは食べたようである。

メンコ

今でも形の変わったメンコを売っているが、大正、昭和を通して男の子なら誰でも一度は経験のある遊びである。長四角のもの、関取の形のもの、円形のもの、といろいろあったが円形の厚紙に侍の図柄が主流で人気があったようである。いかにして相手のメンコをひっくり返すか、全神経を集中したものである。取るか、取られるか、負けた時の無念さは忘れられない。

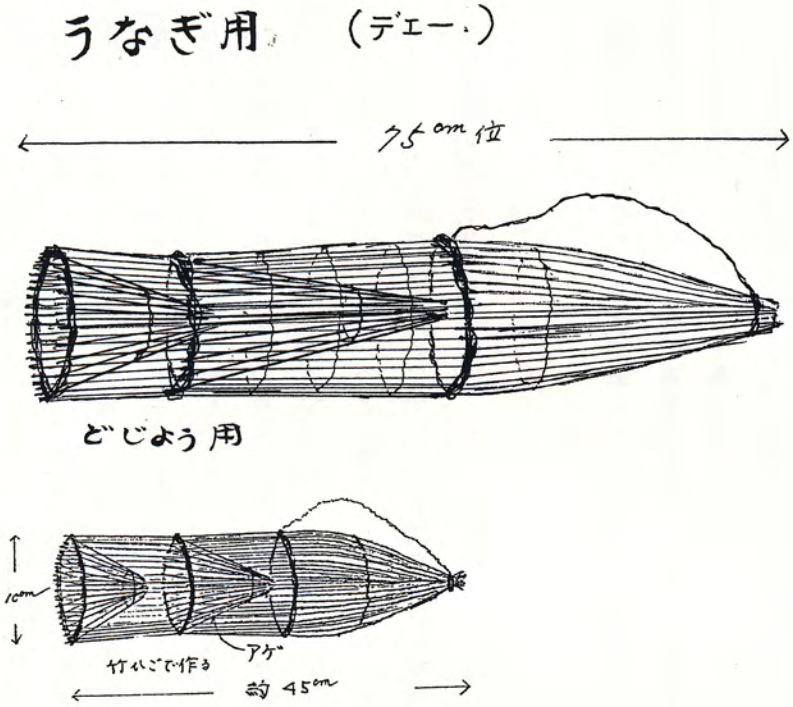
デエー（ドオー）

どじょう捕りの道具である。地域によって呼び名は変っているが、大小の差こそあれ、型は全国どこでも同じようである。田植えの終った六月下旬、夕方になるとデエーをたくさん籠にいれて背負い、田圃や溝に仕かけているのが見受けられた。翌朝早く回収するのである。餌はタニシを潰して米糠の炒ったものを一緒にこねて、ダンゴにして入れる。どじょうは時々空気を吸いに水面に上がってくるので、デエーの一部が水面から出るようにして仕かける。

日照りが続き、田圃の水が心配されるとき、大雨が降ればどじょうは一斉に餌を求めて動き出す。アゲ一杯に入ることもあった。小遣い稼ぎの人、家での食用として捕っている人いろいろであった。又素足で日暮れ道を歩くのでマムシに咬みつかれ話題になることもあった。昭和四〇年頃まで続いた。

うなぎ捕りの大型のデエーもあった。川舟を使って小糸川に仕かけ、捕れたうなぎを売って生活の足しにしていたよう

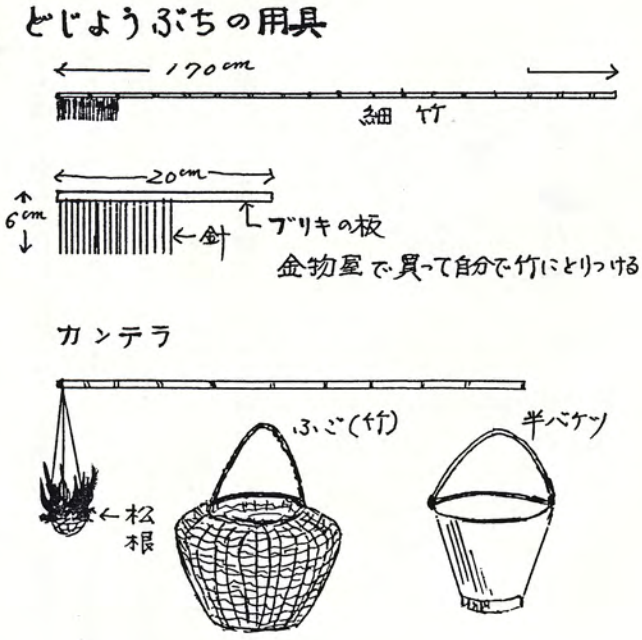
である。餌はミミズを入れて夕方川岸に仕かけ、翌朝回収する。結構商売になっていたようである。水のきれいな昭和三十三年頃まで続いた。



どじょうぶち

春、水ぬるむ頃、田圃が起耕され水が張られるとそれまで地中で冬眠していたドジョウは一斉に活動を始める。昼間は人が近付くと水を濁して土中にもぐってしまうが、夜は水面下十糎ぐらいのところで静かに眠っている。

櫛のように針を並べた金具を二米位の細い竹の先につけ、



カンテラをつけて寝ているドジョウを打つのである。半バケツに針の付け根のところを打ちつけて刺さったドジョウを落すのである。カンテラは松根の乾燥したものを細かく割り、金網のカゴを作ってその中で燃やすのであるが、カンテラに照らされて緋ドジョウに見えるのも不思議である。二人一組で一升ぐらい捕ると終りである。夜風に吹かれながら、夕食後の一時、農村生活の楽しみの一つであった。

味噌汁の中に入れたり、ゴボウと一緒に煮たり、ほろにがい味は格別である。農薬のために昭和三十年頃を境にドジョウや小魚は田圃から姿を消した。

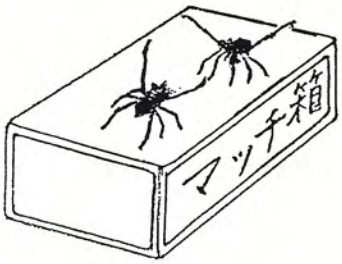
カンキ

喧嘩をさせる蜘蛛の呼び名である。カネグモとかフンチとか地域によって違っているが、戦前（昭和二十年頃）は男の子供達が、夢中になった遊びであった。

冬が去り日差しがまぶしくなる三月の下旬、茶畑のまわりはいつも子供達が集まっていた。カンキになる前のババを探すためである。お茶の木の枯れ葉を集めて巣を作りその中に潜っているので、見つけると大急ぎでクモ箱に入れて肌に近いポケットに押し込むのである。数日間体温で暖めていると、脱皮して黒い剣を持ったカンキに変身するのである。

クモ箱は二立方センチ位の個室で桐の木で作ってあり、三穴（三室）から十穴ぐらいまでの箱を売っていた。しかし高価なので一般にはマッチ箱とかアサリの貝殻に穴をあけて一匹づつ入れて新聞紙に包んで肌身につけ、毎朝のぞいては楽しんでいた。

四月中旬頃になると自然脱皮して、青葉の上で休んでいるので茶畑や藪の中を探し廻ったものである。カンキの喧嘩は箱の上に出して、向き合わせると剣を立て左右に振りながら、接近し戦いの始まりである。かみ合うことはないが直前で逃げた方が負けである。強いカンキを持っていることは仲間の英雄であった。

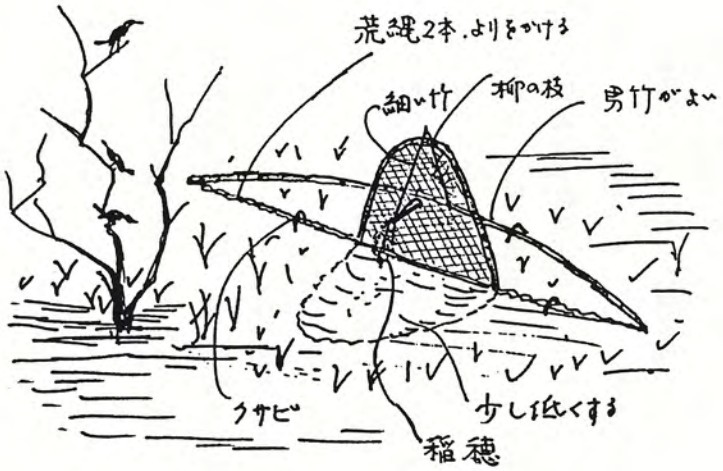


カンキの喧嘩

ボッカブセ

晩秋から冬にかけて、男の子供達が小鳥を生け捕りにする道具である。秋の取り入れも終り、初霜で落葉した木々の間に小鳥が見えるようになった頃、いよいよ始まりである。

日曜日、川渕の日だまりで上級生の教えを受けながら、なんとかボッカブセを作り上げるのである。家から持ってくる材料は養蚕で使い古した、網と木綿糸、荒縄三米位、男子必携の『肥後の守』というナイフである。梅や柳の徒長枝は川べりで探す。苦心惨憺（さんたん）、半日かけてようやく出来上がりである。落穂か、藁（わら）の中から稲穂を探がし、さっそく仕かけに出かける。桑畑や川辺の柳の木の近くか、竹藪か、場所によって捕獲数が決まるのである。竹を割ったクサビで固定し、小鳥のかかるのを待つのである。学校が終り、家に帰って大急ぎで見に行く楽しさは忘れられない。よくかかっていた。狙いはホオジロの雄であるが雌やアオジがよくかかり、風呂の火を燃やしながら焼き鳥にして食べてしまったようである。またモズに網の上から食べられて死んでいる雄のホオジロを見てがっかりすることもあった。多い人は数ヶ所に仕かけてあり、必ず何匹か毎日捕っていた。勉強を忘れて遊びに夢中になっていた時代、昭和十八年頃まで続いたであろうか。

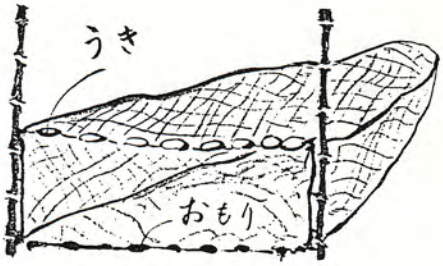


ツッツキ網

江川は中富をとりまくように南側から西側を流れ、小糸川に注いでいるが、水ぬるむ三月の末、西の下で塞き止められ古くから農業用水として多くの耕地をうるおしてきた。満々

と水をたたえた川面は農繁期を告げる風物詩でもあった。夏休みは子供の水泳場となり、澄んだ水はさながら水族館のように小魚を写して揺れ、釣りを楽しみ、常に遊びの中心場所であった。

しかしひと度大雨が降れば堰板（せきいた）がはずされ、再び川底が見えるようになる。待ち続けたツッツキ網の好きな大人達の出番である。夏休みであれば大勢の子供達が川に入って見物した。網は大きな袋で入口が幅三米位、長さが四米位、二人で両サイドの棒を持ち、魚のかくれていそうな、渕に仕掛けるのである。川上から二、三人が竹の棒でツッツイて魚を追い出すのである。ウナギ、ナマズ、フナ、コイ、が驚いて川下の網に入ってしまう仕組みである。コイは網に突き当たると、すぐに引き返すので網を引き上げるタイミングがむずかしい。その他の魚は網の中で出口を探しているので入れば必ず捕えることができた。大人の腕のようなウナギや金色に光る七〇糎位の真ゴイの入ることもあった。獲物は子供の背負っている籠に入れられ、大人の移動に合わせて川の中を一緒について行った。



西の下から入り中富で塞き止めてあるところまで約一・五粁の区間で終りである。獲物は庭に並べて仲間で平均に分配していた。農間のひととき、大人達の楽しみの一つであったのであろう。

唐人凧

大人達が競って揚げた凧である。呼び名の通り昔、中国から伝わってきたものであろう。いつ頃から中富で唐人凧を揚げるようになったのか、さだかではないが村一番の古老、清藏の齊藤国一氏（九十三才）を尋ねた。家の天井には四米近くの凧が吊してあり、別室には数箇の唸りも保存されていた。

子供の頃には父親が揚げていたので、いつしか興味をもつようになり、受け継ぐことになったという。

春一番の吹く頃から、西風や南風の強い日、東前の道でよく揚げていた。子供達が大勢見守る中、（昭和十年代）強風に煽られて大凧が一気に高空に舞い上がる勇壮な動きに拍手を贈ったものである。凧糸は細い麻縄を巻かないで籠に収められていた。揚っているのは駅の上空あたりであろうか。唸

りの音色を広い地域の人々が楽しんだようである。唸りの材料は太い真竹の根本に近い部分を割って、うすく削いだもので幅二十五ミリ、厚さ一ミリ、長さ九十センチ位、凧の頭の部分に弓の弦のようにして装着され、これが風で振動して音を出すのである。風の強弱によってグォーン、グォーンを続けたり、とぎれたり、音色は微妙であったらしい。

唸りの作り方は各人秘密で振動で割れないように和紙を巻いて張り付けたり、柿の渋を塗って硬くしたり、いい音色を求めて思考をこらしたという。十本作っても気に入った音の出るのは一本あれば良いとされていた。竹の質にも関係するので遠くまで貰いに出かけたようである。風が吹けば数人の大人達が集まっては競って凧を揚げ、唸りの音色を楽しんでいた時代、ゆとりある良き時代であったかも知れない。

ポコペン

かくれんぼである。語源は全く不明であるが子供達の流行語であったかも知れない。ジャンケンで鬼が決まると、円陣の中でしゃがんで頭を下げる。誰かが指で頭を突く。鬼は突いた人の名前を言う。当れば鬼は交替であるがそのまま隠れるのを待つことが多い。見つかって名前を呼ばれたら負けである。捜しているとき後ろからポコペンとタッチされたら再び鬼である。絣（かすり）の羽織や洋服の上着を取換えて着ているので咄嗟（とっさ）の場合、名前を間違えることが多い。夕方まで連続になるので餓鬼大将の命令で鬼を交替させる。隠れずに全員が家に帰ってしまった後、薄暮（はくぼ）の中を鬼が一生懸命捜すこともあった。また、よその物置に隠れて漬物のラッキョを盗み出して食べたこともあった。今の時代は問題児として扱われるが家の子もよそで悪いたずらをしているから仕様がない。学校に連絡されることは、もちろん無かった。

第三節　女の人達のあそび

ゴム跳び

輪ゴムを鎖状につなぎ長くし、両端を二人で持ち、スカートのすそをブルマーにはさんで遠くからかけてきて跳ぶ。

低い位置から、だんだん高くしていき、跳べなかった者がゴムの持ち手になって遊んだ。

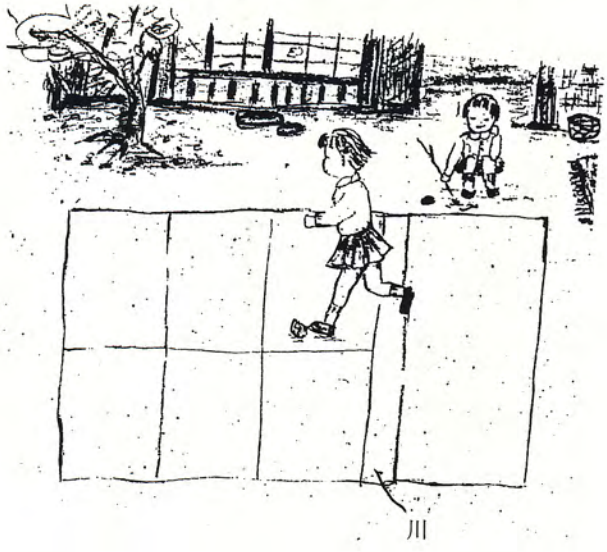
縄跳び

物置等のすみに落ちている縄を親からもらい、両端を二人で持ち回しながら、みんなで順番に跳んでいく遊びで、『郵便屋さん、郵便屋さん……』とか、『熊さん、熊さん両手をついて……』とか唄にあわせ、その動作をしながら跳んだ。

石けり、チョンパタン

道端に落ちている平たい石、家のまわりで見つけた瓦のかけらをある位置に投げて遊ぶ。

石けりは、長四角の中に川を描き、その向うに格子を描きその一つに石を投げ入れ、ケンケン（片足）で蹴飛ばしてもとの位置まで帰る。そして、だんだん遠い位置に投げ入れて進んでいく遊びであった。チョンパタンは、一つ丸、次は両足が入るよう横に二つならんだ丸、次は一つの丸を描いていき、一つの丸に石を投げ入れ、片足で丸の中を飛び最後までいき、帰りに石を取り元の位置に帰った。そして、次の丸に投げ入れ進んでいき、石が丸の中に入らなかったり、友達の石が入っている丸には足がつけないので、よろけて丸の外にでてしまったりした時に次の人とかわる遊びであった。



お手玉

着物や、洋服の余り布を用いて、色とりどりの小さな袋をつくり、小豆やジュズダマと呼ばれる草の実等を入れた。数個を一組として、投げ上げたり、手に乗せたりして遊んだ。

童歌のような歌があり、それに合わせた。色や形を遊ぶ仲間と自慢しあったりもしたものである。

おはじき

細螺（小型で薄茶色のまだらのある巻貝）木の実、豆または小石等をばらまき、指先で弾いては取り合う、女の子の間で行われた遊びであった。後にガラス等で作った平たい玉ができ、自分の弾き当てた数で勝負を決めた。

玉をかぞえるときは、二個づつ数え、例えば十個の時は、『ちゅう　ちゅう　たこ　かい　な』と唱えたりもした。

あやとり

残り毛糸や、きれいな紐を結んで輪をつくり、左右の手首や指に巻いたり引っ掛けたりして綾にし、相手とお互いに取り合って像を次々に変えて遊んだ。像にはそれぞれ小川、魚、はしご等名前がつけられていた。

最初から、一人で像をつくる『ひとり綾取り』もある。主に雨の日に、姉妹、近所の女の子などで行う室内の遊びであった。